

スケルトンルーム サンプル

1. 趣味

(この辺かな)

有賀郁実ありがいくみは尻を少し動かすと、テーブルに向かって足を開いた。

その上には本が数冊重ねられ、カメラを起動した携帯が立てかけられている。

郁実はまだ柔らかな中心部を見せつけるように上体を反らせると、自身の太ももを撫でる手をゆっくりとそこに向かって動かした。

「アッ……」

勃起したペニスよりも、柔らかな状態のそれを見られる方が興奮する。

ペニスを握った手を少し動かすだけで、ペニスはすぐにむくむくと膨らんで形を変えた。

完全に起ち上がったところで手を離し、勃起全体をカメラに映す。そうしながら両手を胸の前でクロスさせて乳首をこねると、尿道口からはすぐに透明な愛液がこぼれた。

「あぁっ……」

このじれったさが欲望を高める。

郁実は腰が勝手に揺れ動くまで乳首をこね続けると、

ペニスを握り、思いきりしごいて白濁を飛ばした。

『アップデートを完了しました』の表示が出た後、郁実
は新着コメント一覧を開いた。

【ケイクン、今回の動画もエッチだね】

【おしりも見たいな】

【次はおもちゃを使って。えっちなおもちゃを送って
あげたい】

【まだ処女？】

【ケイクンのちんちん舐めたい】

【今回のオナニーもかわいい。ケイクンの動画見て三
回も抜いちゃった】

みんなが自分の痴態を見ていやらしい気分になって
いる。それが言葉にならないほど身体を高める。

ポコン。

今アップしたばかりの動画にコメントが付いたらら
しい。そちらのページを開いてみる。

「あ……」

文章はなく、ハートの絵文字が一つだけ。

「いつもの人だ……」

郁実がこのゲイ向けエロ動画投稿サイトを利用する
ようになった直後から、ずっと見てくれている人。けれ
ど一度だって文章が届いたことはない。

(どんな人なんだろう)

すべての動画を見てくれていて、必ずハートの絵文

字をくれる。コメントがなくても、気に入ってくれてるのは確かだった。

（この人も僕のオナニーを見て興奮してるのかな……）
もしかしたら、興奮のままに絵文字を一つ送ってくれているのかもしれない。動画に夢中で文字なんて打つ余裕がないから、だから——。

そう思ったら、無性に身体が熱くなった。

（次はお尻……してみようかな）

いつもと違うことをしてみたい。

ピロンと音がしてメールが届いたことを知らせた。受信したアドレスは、動画投稿用に『ケイ』として作ったもの。送り主の登録はない。知らない人だった。

【はじめまして。いつも動画を拝見しています。

無料で載せていらっしやいますが、身体を見られることをお仕事にしてみませんか。

ケイくんだったらしっかり稼げると思います。それに編集の手間や家バレの不安などもなくなります。A
Vのように誰かと絡む必要もありません。

透明な部屋の中でカメラに囲まれて、裸で過ごすだけです。危ないことは一つもないので、もしよかったら連絡をください。山城やましろう】

署名欄に載せられていた企業情報は、有名なアダルトグッズの会社だった。

（透明な部屋の中でカメラに囲まれて過ごす……）

ワンルームアパートの中で小物まで排除し、壁紙以外は映らないように片付けをしてから撮るのは大違

いだ。

(しかも仕事になるって)

みんなに見られるだけで楽しいのに、それでお金が稼げるなんて。

今、郁実が生業にしているのはファストフードのアルバイト。時給はこの地域の最低賃金。高校を二年で中退してからの三年間、ずっとフリーターだった。

(風俗だったらたくさん稼げるよな……)

しかも、人と絡む必要はない。

でも山城が偽称していたら――。

もしこの会社名が嘘でなければ、危ないことはないだろう。男なら誰でも知っているような有名企業だ。

郁実は会社名を検索すると、住所や電話番号がメールに記載されたものと一致していることを確認し、緊張に手を震わせながら発信ボタンを押した。

2. スカウト

「はじめまして。山城です」

「は、はじめまして」

「どうぞ。乗って」

待ち合わせの場所にやってきたのは百六十五センチの郁実よりも二十センチは身長が高く、穏やかな笑みを浮かべる落ち着いた雰囲気イケメンだった。

年齢は三十代半ばくらいだろうか。体にフィットしたスーツは黒に近いグレー。

「本当は腰を落ち着けてからがいいんだけど」

不安だろうから、と運転席に座った山城に早々に渡された名刺には専務と書かれていた。

「すみません、僕、名刺とか持ってなくて」

「気にしないで。それよりご飯屋さんとカラオケ、どっちがいい？」

「えっ？」

「ほら、人前で話せるような内容じゃないから。個室のご飯屋さんか防音のカラオケか。ホテルでもいいんだけど、それは不安でしょ」

「あ……じゃあカラオケで」

「了解。歌ってくれてもいいよ」

こういうことに慣れているのか、山城は口が滑らかった。表情の穏やかさもあって、詐欺やヤクザだったらどうしようという心配が消えていく。

山城はゆっくりと車を発進させた。

「電話、ありがとうね」

「いえ、こちらこそメール、ありがとうございました」

「驚いたでしょ」

「まあ……」

「最初は趣味の範囲で楽しんでるだけの子かもって遠慮してたんだけど、やっぱりもつたいないなって」

「もつたいない、ですか」

「うん。お金になるのになって」

「……ありがとうございます」

サイトのことを言われて、山城が郁実のオナニー動

画を見たことがあるのだと改めて意識してしまった。
全身がカアアつと熱くなる。

「あの、普段からああいいうサイトで働く人を探してるんですか」

「うーん……まあ、たまにね」

山城の返事は曖昧だった。

なんだか濁されたような気がしたけれど、仕事上の秘密でもあるのかもしれない。山城が言葉を続けようとはしなかったので、郁実も口をつぐんで流れていく景色を眺めた。

見慣れた街。けれど普段、車に乗ることがないのでどこか景色が違って見える。

メールをもらった日、郁実は身元の確認のために会社に電話をかけ、山城を呼び出していた。

どちら様でしょうかと尋ねる女性にエロ動画で使っている名前^{ケイ}を告げるのは憚^{はばか}られて、「山城さんに、先ほどメールをもらった者から電話だとお伝えいただけないでしょうか」と頼むと、思ったよりすんなりと山城に代わられ、あちらから「ケイくんですね」と言ってくれた。

そこからはトントン拍子だった。山城の話術にはまったとも言えるかもしれないが、その電話で面談する日取りが決められて今日に至った。

山城の車が近くのカラオケ店の駐車場に止まった。受付を済ませて個室に入る。飲み物が届くまでは互いに無言だった。しかしコーヒーとオレンジジュースが

届くと、山城は慣れた手つきで機械を操作し始めた。

「無音なものもCMが流れ続けるのもあれだし、何か適当に流しておこう」

すぐに小さな音量でバラードのイントロが流れだした。郁実でも知っているバンドの新曲だった。

「さて、改めまして山城です」

「ケイ……松崎郁実です。よろしくお願いします」

L字型のソファで斜めに向かい合い、頭を下げる。

「こちらこそ。今日は来てくれてありがとう」

「いえ」

「話を聞いて、無理だと思ったら断ってくれて大丈夫だから、安心して」

「はい」

郁実が居住まいを正すと、山城はカバンからファイルを取り出した。数枚の写真と間取り図がテーブルに並べられる。

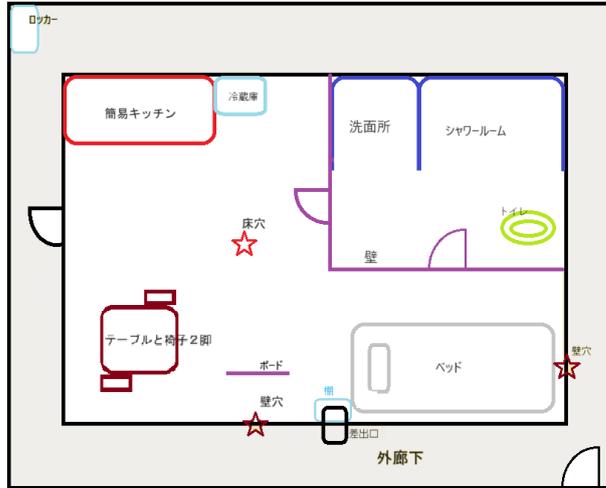
「これが、男の子が過ごす部屋。通称スケルトンルーム」
テーブルに置かれた三枚の写真は、同じ場所を違う角度から撮影したものだった。

透明な、おそらくガラスでできた四角い部屋。

見える範囲で色がついているのはシャワールームの横に置かれたバスタオルと、トイレに設置されたハンダタオル、それからベッドに敷かれた布団だけ。シャワーホースもトイレの便器もすべてが無色透明だった。
「すごい……丸見えですね」

「うん。部屋には小型のカメラがいくつもあって、死角

スケルトンルーム サンプル



はないよ。この中で身体が見えなくなるのは布団の中だけかな。でもうちで働いている子は寝ている時の自然な勃起や夢精も見られたいからって、掛け布団を使わない子が多いんだ。まあ、そういうのを求めるお客さんが多いともいうんだけど。あ、小さな音でも拾える高性能マイクもあるよ」

「マイクも……」

カウパーをまとった先端をこねる音まで拾われてしまうのだろうか。

「この紙が間取りね」

示された紙を見ると、どうやらその部屋は廊下でぐるりと一周囲まれているらしい。その廊下に入るためのドアを右下にすると、口の字の一面目に透明な部屋への入り口がある。

口の字の空いた真ん中が部屋で、左上がキッチン、右上が洗面台とお風呂、その下の空間に狭いトイレがあつて、右下がベッド。左下はダイニングテーブル。仕切られているのは洗面所と風呂、トイレの一角だけだった。

「どこにいても見られるってことですね」

「そ」

あまりにも徹底された部屋で、それ以上は言葉が出なかつた。ただ自分がこの箱の中で過ごしたらどうなるだろうと、いやらしい妄想が頭の中に広がる。

「食事は一日に三回、おやつは二回。もちろんアレルギーや好き嫌いにも対応してるよ。早めに言ってくれば希望した食事を出せる。基本的に清掃はスタッフがするんだけど、その間はカメラをオフにすることになっちゃうし、掃除をしている自然な姿を見たいってお客さんがいるからって自分でする子もいる。タオルとかの洗濯はもちろんこっちでするから、濡れた物やシーツとかの汚れ物はこの部屋を囲む外廊下に出しておいてくれればいいよ」

「すごいですね……」

ようやく出た言葉はそれだけだった。

「結構至れり尽くせりでしょ。ただデメリットは、携帯

やテレビ、パソコン、ゲームの類は持ち込めないことかな。そっちに集中されちゃうとお客さんもつまらないから、携帯はこっちでお預かり。でも食事と一緒に届けるから、その間は使えるよ。それ以外の時間でも先に指定しておいてくれた相手から連絡がきたらちゃんと繋ぐし。もちろん充電もしておくから」

「じゃあ、実家とかから電話が入ったら繋いでもらえるってことですか」

山城が頷く。

「でも、友達とかは微妙かな。急用って感じだったらいいんだけど、遊びの誘いとか愚痴聞いて〜って電話とかだとちょっと困る。ここにいる間はあくまで仕事だからね」

そういう連絡をしてくるほど親しい友達はいなかった。しかしそんなことは恥ずかしくて言えない。

「そういう連絡、結構多い？」

「いえ、実家からの連絡だけ教えていただければ……その、実家からも基本的に連絡はないので、もし電話があればすべて緊急の用なので」

何か言われるかなと思っただけれど、山城はわかったよ、と目を細めて頷くだけだった。

「携帯の普段使いはできないけど、お客さん——視聴者のコメントがリアルタイムで表示される端末は渡すよ。ニュースの速報なんかはそれにも通知が行くから、災害とか大きな事件とかは知れるし」

携帯が使えないのは痛いけれど、最低限のニュース

を知ることが出来るならまだいいだろう。それに、みんなに見られていると思うときっと携帯をいじっていても落ち着かないはずだ。

「他にデメリットはありますか」

「そうだなあ」山城が顎を撫でる。「排泄物も全部見られちゃうってことかな。このとおりすべて透明だから。排泄物が出る水道管も透明なんだ」

「すごい……」

そちらの動画を撮ろうと思ったことは一度もなかった。けれど嫌悪感はない。

「エッチでしょ。言うまでもなくオナニーだってみんなに見られちゃう。それはまあ……ケイくんは好きだろうけど。家で自分で撮ってるのとは違っていろんな角度から見てもらえるし、端末で感想を読みながらできる」

「リアルタイムでつてことですよね」

「そ。今まさに自分をオカズにしてるオナニーの感想を読みながらするの。ある意味相互オナニー？ つて言うのかな。そういうの、好きじゃない？」

「あ……」

すごくいやらしい。けれどそれを言葉で認めるのは恥ずかしくて、曖昧に視線を逸らしておく。山城も無理に返事は求めなかった。

しかし無言のままではいられず、思い浮かんだ疑問を口にする。

「あの、一日何時間ぐらいここにいますか」

郁実の質問に、山城はハツとした後で苦笑した。

「大事なこと言うの忘れてたね。最低二時間からだけで、ずっと入りっぱなしの子が多いよ。勤め人してる子もいるけど、うちだけの子はもはや住んでるね」

「住んでる……」

「そ。はまっちゃうんだよ、本当に。最初は週五って言ってた子も、働き始めると部屋から出たくないって言ってずっといる。一人暮らししてた部屋を引き払っちゃった子もいるし。そもそもみんな、働いてるって感覚がないと思う。さっき言った、仕事してる子もこの部屋に帰ってくるし」

「そうなんですか……」

そんなに楽しいのだろうか。もちろん山城はリクルートしようとしているのだから、いいことばかり並べたてるだろう。けれどもし今の言葉が本当なら、とてもいい職場ということだ。

「休日は自由。個人事業主ってことになるから、労働時間の制限は適用外。休みが欲しければ、まあできれば事前に教えてほしいけど、自由に取れるよ」

「わかりました」

普通に働くよりもだいぶ緩そうだ。急用が入ることはほぼないけれど、臨機応変な対応してもらえるところは助かった。

「それから……恋人はいないって電話で言ったよね。曜日が決まってる予定とかある？ 習い事とか」

「いえ、なにも……だから、決まった休みとかは大丈夫

です」

「よかった。じゃあ次は——そうだ、この部屋、普段は鍵はかかってないから」

「え？」

それでは好きに外に出られてしまうのでは——そんな郁実の疑問を察した山城が再び苦笑をこぼした。

「鍵をかけたら監禁になっちゃうでしょ。気を付けてはいるけど万が一、火事とか起きたら困っちゃうし」

「あ、そうか……でも普段はって何ですか」

「それは後で説明するね。で、だから部屋にはあくまで自分の意思として入ってもらうんだけど、その前にみんなに売上目標金額を決めてもらってるんだ」

「金額、ですか」

「そ。モチベーションアップのためかな。だんだんだらけてきちゃうかもしれないからってことで、オープン当初に決まったんだけど。でもまあ、みんな飽きることなく楽しんでるから、もうあってもなくても同じなんだけどね。あくまでただの設定で、その金額の達成を強制するわけじゃないし」

「そんなにみんな、はまるんですか」

「ケイくんは動画をアップするのやめられる？」

「あ……」

無理だ。

その気持ちを山城は読んでいた。

「でしょ。あのサイトでケイくんの動画を見ているのはオナニーを見たいって人ばかりだと思うけど、こ

こに入るとそうじゃないんだ。もちろんみんな、エッチな姿を見たいって思ってるよ。でも『エッチな姿』として求めるものは人それぞれ違う。ご飯を食べているところが好きとか恥ずかしそうに排泄する姿が好きとかシャワールームで身体を洗う姿が好きとか、それこそさっき言ったように睡眠中の自然な勃起が好きとか、ありのままの姿に興奮するって人が世の中にはたくさんいる」

想像もしたことのない世界。

どう？ と山城がほほ笑む。

「すごい……です」

「ケイくんがご飯を咀嚼している姿を見ながらオナニーをする人だっているってことだよ」

「あ……」

「飲み込むときの喉の動きが好きって人とか。人の欲望はそれぞれだからね。ぼうつとしていた姿がいいって人もいるし」

「そうなんですわね……すごい……」

はう……と深い息が漏れる。

これまでは、オナニーをしているところしかオカズにしてもらえない、興奮してもらえないと思っていた。

（食べてるところもオカズになる……）

なんていやらしい世界だろう。いやらしいことを意識していない姿をオナニーに使われるなんて。

「この部屋——スケルトンルームに入れば、二十四時間いろんな男の人の性欲の対象になる。ケイくんの何

気ない日常の全部が見ず知らずの人のオカズになるんだよ。エッチだよね」

(ああ……)

想像したらペニスが疼いてしまった。なんとか落ち着かせないと、思いながら、しかしいやらしい部屋が写された写真をついで見ってしまう。

「で、俺は、ケイクくんは目標金額二千万ぐらいがいいと思ってる」

あまりの大金に飛び退いた。

「二千万?! や、そんなの無理です!」

室内を見る料金がいくらなのかはわからない。一時間を千円としたって、二十四時間で二万四千円。もちろんぶっ通しで見る人なんてまずいないし、何人かで二十四時間分としても一日二万四千円では一年以上かかる計算になる。そもそもそんなに見てもらえるかわからない。

「いや、さっきも言ったけどただの設定上だから。達成未達成関係なく自由に退職できるよ。達成した後にもそのまま残ることもできる。でも二千万は無理な金額じゃないし、期間が短すぎるわけでもない、いい塩梅かかって。ちなみにケイクくんの取り分は、売り上げの半分。半分も取られるって思うかもしれないけど、家賃も光熱費も食費も全部そこに含まれてるから、悪くはないと思う」

(ってことは、本当に二千万円売り上げたら一千万が手に入るってこと……)

最低時給のフリーターには想像もつかない金額だった。

「視聴者ゼロが一週間続いたら辞めてもらうことにはなるけど、今のところそうなった子は一人もいないから安心してね」

「よかったです……」

つい口から出た言葉。それで山城は、郁実の気持ちがあ就職に傾いていると悟ったようだった。説明を続ける。

「お客様の選ぶコースは三つ。まず部屋に設置されたカメラからの映像をネットで見るだけのネットコース。それからこの部屋を囲む外廊下——本来の外廊下とは意味が違うんだけど、うちではこの部屋を囲んでる廊下を外廊下と呼んでね、ここに直接男の子を見に来るのが来室コース。そしてカメラもマイクも切って二人きりになる独占コース」

「独占……」

「うん。だけど部屋の中には入ってこないよ。外廊下から壁越しに面会するだけ」

「壁越し……ですか」

「そ。さっき言った鍵をかけるってのは、来室コースと独占コースのときのことなんだ。万が一無理矢理押し入って……なんてことがあったらまずいからね。ちなみに自動施錠。でも一応、事故防止のために内側からと、外からでもスタッフは開錠できる」

「ああ、そういうことなんですね」

直接触れ合わなくていいというのは安心だけれど、

いくら透明とはいえ、壁越しでは話すことさえままならないような気がした。きっとあくまで見世物としての場所なのだろう。

「動物園みたいって思っておけばいいですか？ お客様さんは檻に入れないけど、飼育員さんは出入りできる、みたいな」

例えがおかしかったのか、山城がくすりと笑う。

「そうだね。まあ、動物は自分で鍵開けられないけど」

「あつ、そうでした」

「お客様さんどうやって過ごすか——ただおしゃべりをするだけなのかエッチな指示を受けたりするのか、それは人それぞれ。たとえば独占コースだからといって、お客様の言うことをすべて聞かなくちゃいけないってことはないし。ただまあ、叶えられることなら叶えておいた方がリピーターに繋がるのでプラスにはなるかな。でもその判断は本人にお任せしてるから。ちなみに料金は、さっき言った順番で高くなるよ」

3. 職場

「どうぞ。ここが今日からケイクんの職場」

山城に初めて会ってから一か月半。

勤めていたファストフード店を退職してからの入職となった。

ビルの入り口から店に入り、廊下を進んで個室に向かう。

スケルトンルームを囲む廊下の広さは約一・五メートル。左に進んで右に折れると、これから長い時間を過ごす部屋のドアがあった。

「出入りはここね」

山城が先に入室した。

ドアの厚さは五センチほどだけれど、壁はさらに分厚く二十センチはありそうだった。

(防音……じゃないよね)

それでは来室や独占コースが楽しくないだろう。

(でもなんでこんなに……?)

割れないようにだろうか。尋ねようと思ったけれど、山城は黙ったまま郁実を待っていた。後で訊くことにして、階段を三段上がって中に入る。

透明な床の下には空間があるので、体重をかけると割れてしまうのではないかと少し怖い。

「大丈夫？」

「あ、はい、すみません」

「慣れないと怖いよね」

笑いながら、山城が今入ってきたドアに視線を向けた。

「カメラがオンのときは外廊下にも出入りしないでね。外に出たいとか用事があるときは、そこにある二つのボタンを使って」

そこ、と言って山城はスケルトンルームに入ってすぐ、いわゆる玄関に当たるドアの横を指した。

「赤いボタンを押すとスタッフが来る。お腹が空いた

とか、ちよつと体調が悪いとか、シーツを濡らしちゃつたとか、困ったことがあったときは遠慮せずに押してね。オートロックの解除はその右にある小さなボタンね。そもそもロックがかかるのはお客さんがここにいるときだけだから、こっちは来室や独占コースのお客さんがいきなり倒れたとかっていうようなときにだけ使つて。ちなみに押すとスタッフルームに通知がいつてスタッフが飛んでくるから。お客さんと触れ合うためとかは絶対にダメ。そしたら一発でクビになるよ」

「わかりました」

答えてから、改めて室内を見回す。

部屋は、写真で見たものとまったく同じ透明な1D Kの間取りになっていた。

右奥にはベッドが見え、その左にトイレとシャワールーム、左手前にはキッチン。右手前にはダイニングテーブルと二脚の椅子。そのうちの一脚には、座面に透明なデイルドが付いている。

(ここでご飯……)

デイルドが入ったまま食事なんてとれるだろうか。もちろん、もう一脚の何もない方に座ってもいいのだろうか。――。

簡易キッチンには、可能な限り視界を遮らないようにするためか、調理器具は置かれていない。尋ねてみると、希望があれば貸し出すとのことだった。

「料理もしていいんですね」

「やけど防止のためにエプロン必須だけど」

「あ……」

裸エプロン。想像して顔がほてる。

「料理、好き？」

「嫌いではないですが、作ってはいました。でも食事を
出していただけなら、その方がありがたいです」

「じゃあ、気分転換でもしたくなったら遠慮なく言っ
てね。基本的には作りたいものを言ってもらえれば、必
要な食材や調理器具はこちらでわかるから。食事じゃ
なくおやつ作りとかでもいいよ。匂いにつられて俺が
来るかもしれないけど」

「ははは。甘いもの好きなんですわね」

「甘いものを幸せそうに食べてる子を見るのが好きな
の」

山城は本音か冗談かわからない顔で笑うと、ベッド
の枕元に立った。棚の上の壁に、透明な取っ手がついて
いる。山城がそれを引いた。

「この差出口はお客さんと物をやり取りするためにあ
るんだ。手前に引いた状態で物を入れて押し出すと相
手が受け取れる。逆も同じ。もしサイズオーバーでも、
入り口のドアを開けて手渡して受け取るようなことは
しないで。繰り返しになるけど、指先だけだろうと、お
客さんと身体を触れ合わせてはいけないよ」

「はい」

「じゃ、部屋をいろいろ見ておいで」

寝室からトイレ、浴室、洗面台、キッチン、ダイニン
グと反時計回りに一周して山城の元へ戻る。

「わからないこととか聞いておきたいことはある？」

「タオルとかはお借りしちゃっていいんですよ」

「もちろん。好きなだけ使って。一日にシーツを三回交換する子もいるよ」

「それって——」

「もちろん、濡れちゃって、って」

何で、とは訊くまでもなかった。

「マットレスの上には防水シートがかかっているから、遠慮なくどうぞ」

こちらは何を、とは訊けなかった。

「——そうだ、これ渡しておかないや」

山城がポケットから手のひらサイズの機械を取り出した。

「お客さんからのコメントはこれで確認して。投げ銭も一緒に表示されるので、参考に。あと一番下にリアルタイムの売上金額が載っているから」

礼を言って受け取る。すでに画面がついていた。しかしコメント欄は閉鎖中になっている。

「カメラやマイクがオフのときは、コメント欄は閉鎖中になるから。カメラがついたら動き出すから、目安にしてね。コメント欄が閉鎖中でもニュースや金額は動くから」

「わかりました」

「独占コースは予約があれば予約の時間が表示されるよ。でも予約なしでお客さんが来ることもあるから、そんなときはコメント欄が閉鎖になっているかどうかで判

断してね。来室コースは閉鎖にならないから」

「えっと……？」

一度では理解しきれなかった。首をかしげると、山城が言葉を変えて説明をしてくれる。

「独占コースはカメラとマイクはオフになって完全に二人きりだけど、来室コースはただこの部屋に人が直接見に来るだけなんだ。だからカメラもマイクもオンのまま」

「じゃあ、来てくれた人の姿もネットで流れちゃうってことですか」

「うん。けど来室コースのお客さんは仮面をつけて入ってくるから身バレはしないようになってるんだ。手荷物もフロントで預けられるし、心配な人はここで服も貸し出してるから」

「すごい……」

「あ、スタッフが来るときもカメラとマイクがオフになるから、コメント欄は閉鎖になるよ」

「じゃあコメント欄が閉鎖されたら、独占コースのお客さんかスタッフさんがいらっしやるって思っておけばいいということですね」

「そう、正解。他に何か質問は？」

「いえ……多分ないと思います」

おおまかな説明はカラオケでも聞いていた。しかし実際に部屋に入ってみると、頭が追い付いていかなかった。今はここで聞いたことを認識するのに精一杯で、何がわからないのかもわかっていない。

そんな郁実に山城がほほ笑む。

「うちは客層がめちゃくちゃいいから、あまり硬くならなくて大丈夫。それに、慣れるまではたまたま様子を見にくるよ。そのときはカメラもマイクもオフになるから、安心して不安や悩みを話してね」

心強い言葉だった。端末を胸に抱くように持って頭を下げる。

「ありがとうございます」

「じゃあ、さっそくですけど準備を進めようか」

「準備、ですか」

何があるのだろう。入職の書類はもう書いて受理されている。

「……あ」

きよんとする郁実を見て、山城が目を見開いた。それから頬を掻く。

「ごめん、言い忘れてたかも。壁と床に穴を開けないといけないくて」

「穴？」

「うん。来室や独占コースのときにお客さんがここに来るでしょ。そのときに直接触れ合うのはNGなんだけど、壁に開いた穴を通して、玩具とかでいじってもらうのはOKなんだ。どうしても嫌だったらNG登録してもいいんだけど、どうする？ 穴はアナルとおちんちんの高さに合わせるから、裸でするけど」

「みなさんはどうしてるんですか」

「ぼこぼこ穴開けてるよ」

「ぼこぼこ……」

「最初は見られてるだけでもじゅうぶんらしいんだけど、やっぱり物足りなくなっちゃうみたい。お客さんもいじれない子よりいじれる子を好むしね」

「……じゃあ、お願いします」

「大丈夫？」

「はい」

クビになりたくないし、可能な限りたくさんの人に体を見られたい。オカズにされたい。

しばらく郁実の気持ちが変わらないか確かめるような目をしていた山城が、内ポケットから携帯を抜いた。誰かに来るように指示をする。

「今、スタッフが来るから。ちょっとだけ待っててね」

「は、はい……」

決めたのは自分なのに、緊張で息が苦しかった。鼓動がバクバクと鳴っているのが聞こえる。

「大丈夫だからね。恥ずかしくない——いや、恥ずかしいのを楽しんでごらん。俺はもう、ケイクんの体を知ってるから」

そうだ、動画を見られている。それを見たからこそ、こうしてスカウトしてくれたのだ。

「先に脱いでおく？ 数人の前で脱ぐ方がいいか、まずは俺だけの前で脱ぐか」

「……さ、先に」

「じゃあ、裸になってみよう。穴を開けるだけなら下だけ脱げばいいんだけど、せっかくだから全部脱いじゃ

おう。中途半端な方が恥ずかしいし」

掠れた声で「はい」と答え、シャツを脱いでベルトを引き抜く。ズボンを下ろしたところまではどうにか頑張れたけれど、ボクサーパンツを下ろすのはどうにも恥ずかしくて、なかなか指をかけることができなかった。

しかし、郁実が動きを止めても山城は何も言わない。ただじっと、パンツ姿の郁実を見つめていた。

(うう……)

恥ずかしい。けれどこれが、これからの自分の仕事なのだ。恥ずかしいところを余すことなく見てもらう。それを自分で望み、ここに来た。

ぎゅっと目を閉じて下着を下ろした。陰部に視線を感じて、思わず膝をすり寄せる。

「かわいいね」

「っ……」

何が、とは言われなかったが、今の言葉がどこを指しているのかはわかった。緊張で、普段以上に小さく縮こまっているペニス。

「大丈夫だよ。みんなそうだから。見られることが大好きなのに、ここに来ると緊張しておちんちんを小さくしちゃうんだよね」

「みんな……。本当ですか」

「うん。俺が知ってるのは自分でスカウトしてきた子だけだけど、全員そうだったよ。でも今では部屋に遊びに行っても恥ずかしがる様子もなく普通にしてるよ」

自分にもそんな日が来るのだろうか。

羞恥をごまかすためにしゃべりたいのに、緊張で口がうまく動かない。もごもごしていると、外廊下に工具箱を持った二人の男性が入ってきた。

「あっ」

慌てて股間を手で隠す。けれどそれを山城が見咎めたのがわかった。膝をすり寄せながら、なんとか股間から手をどかす。

「お疲れ様です」

「早速ですがお願いします」

山城に了解と言つて、二人が工具を取り出し始めた。

二人は慣れている。近くに全裸の人間がいても気にならないのだろう。けれど郁実は違う。これまで、誰かに直接裸体を見られたことはない。

男性たちはしゃがんで、床に置いた工具箱に向かっている。

間がもたない。どうしたらいいかわからず、バツと頭に浮かんだ疑問を口に出す。

「あ、あの、壁が厚いように見えたのに声は通るんですね」

「ああ、オナニーしているエッチな声が聞こえないと寂しいからね」

山城が天井を指した。つられて見上げると、壁は天井には届いておらず、数十センチ空いている。

「エッチな匂いも恥ずかしい匂いも全部漏れるよ」

「あ……」

山城はどんな匂いのことを言ったのだろう。精液や尿だろうか。

スタッフの一人が山城を呼んだ。

「壁からでいいですか」

頷いた山城が、ベッドの枕側とダイニングの中間にある壁を指した。

「じゃあ、ケイクン。一つ目の穴はここ」

その壁に向かい合うように一メートルほどの距離をおいて、ボードが設置されている。それによって、そこだけ短い廊下のようになっていた。

山城が、壁と平行して設置されたボードに触れた。

「このボードに手をつっ張る感じで、お尻をこっちの壁に押し付けてね」

恥ずかしくて、いやらしすぎて動けなかった。けれど山城は急かすことなく、むしろ楽しそうに口角を上げる。

「お尻の肉を開いて、この透明な壁でぎょう虫検査をするみたいにお尻の穴を押し付けるんだよ」

壁の外には、工具を手にした男性が二人立っている。

「あのおじさんにえっちなお尻を見せてくださいらん。」

僕のお尻の穴の大きさを確認してくださいって」

「っ……はい……」

今からとてつもなく恥ずかしいことをする。心は確かに興奮しているのに、体は緊張で動かない。

(見せたいって思ってるのに……)

恥ずかしいところを見られたい。恥ずかしいことを

させられたい。

服を脱いだときののように、山城は手を出すことなくじっと郁美が動くのを待っていた。覚悟を決めて男性スタッフに一礼してから壁の前に背を向けて立つ。

「ちゃんとお尻の肉を開くんだよ。あまり体をピンとさせると太ももの裏辺りがつらいかもしれないから、長時間その体勢を維持させられても大丈夫な高さにして」

「はい……」

両手でお尻の肉をぐっと開く。腰を折ってお尻を壁に押し付けようとするときにはよろめいたけれど、山城が支えてくれた。

「す、すみません」

「自分でできて偉いよ。他の子はどうしてもできなくて、俺がお尻を開いたから」

そんなことをしてくれたのか。それなら最初から言ってくれたら良かったのに。

されるより、自分でする方が何倍も恥ずかしい。

山城が作業員に問いかける。

「アナルは見えてる？」

「ばっちりです。この位置でいいですか」

「ケイくん、大丈夫？」

「う……は、はい」

今、二人の男性にお尻の穴を見られている。そう思ったらペニスに血が集まり始めた。

（早く終わってっ）

でも同時に、長くこの時間が続けばいいとも思う。
次第に呼吸が速くなる。

「興奮してるね」

山城から、勃起したペニスは見えないはずなのに。
「すごいエッチな顔になってるよ」

「あ……」

山城を見上げると、絡みつくような瞳と視線が交わった。ねつとりと、まるでいやらしいことをしている姿を想像されているような気分になる。

「口、開いてる。体温が上がりすぎて息苦しい？」

まるで言葉の愛撫だった。気分を高められている。

「あ……は、ふ……」

「これから、ケイクんの体でたくさんの男たちがオナニーをするんだよ。ケイクんの体に向かって射精するところを想像する人もいるだろうね」

「あ、あ……」

「たくさんの人にぶっかけられて、全身がぬるぬるになっちゃうね。乳首も、かわいいおちんちんの皮の中も、お尻や、もしかしたら尿道の中でだって誰かの精子がケイクんを孕ませようと動くかもしれない」

「あ……あ……あ……あ……」

実際にはそんなことにはならない。けれどこれからそんなふうになれるのだ。そんなふうになるくらい量を、自分の体をオカズに射精してもらおう。

イきたい。ペニスが苦しい。でもまだ、アナルを壁に押しつけていないといけない。

「ケイくんはこの部位が一番人気になるかな」

「え……？」

射精欲で、もう頭がろくに回っていない。

「陥没乳首の子は、みんなに乳首いじりをねだられ続けて乳首だけで射精できるようになったんだよ。恥ずかしくてなかなかおしっこができなかった子は膀胱炎になっちゃって、強制カテーテル処置を受けることになったんだけど、それが合ってたみたいで今は尿道に何か入ってないと落ち着かなくなっちゃった。もちろんオナニーは毎回尿道いじりで、おちんちんを支える以外の目的ではほとんど触っていないんじゃないかな」

「あ……そんな……」

「ケイくんはどこを育ててもらおうのかな。どこを育ててほしいと思う？」

「あ……」

「そんなの、全身だ。どこか一か所だけなんて選べない。どこもかしこも敏感にして、いやらしい体にしてほしい。」

「――山城さん」

突然割り込んだ声にハツとする。

「輪郭は取れましたよ。あとは穴を開けるだけですから。他はどこですか」

「ああ、では床に」

了解、という低い声が背後から聞こえた。

「さあケイくん、次は部屋の中心だよ。べたりと座って、下からお尻の穴を見てもらおう」

体をつっ張らせるのをやめて振り返ると、工具を手にした男性が、キャスター付きのボードに仰向けで寝転んでいた。足で床を蹴り、仰向けのまますいすいと郁実のいる部屋の床下を進んでくる。

山城が部屋の中央に移動した。そちらに続く。

途中振り返ると、今お尻を押しつけていた壁に描かれた丸に、男性がドリルのようなものを当てているのが見えた。

(恥ずかしすぎるんだけど……)

でも、みんな当然のような顔をしている。郁実だけが一人で盛り上がってしまっている。

「ケイくん、さあ」

「は、はいっ……」

山城に再度促され、示されたところに視線を向ける。そこに座れということだ。しかし透明な床の下では、ライトとペンを持った男性が仰向けになっている。

待たせるわけにはいかない——それは自分への言い訳でしかなかった。恥ずかしいところを見せつけない。見られたい。でも抵抗なくするのはまるで淫乱だと名乗っているみたいだから——。

おずおずと歩を進め、男性の顔の真上に腰を下ろす。床下も、山城の方も見られなかった。ぎゅっと目をつぶり、終わるのを待つ。

何の音もしない。下で何をされているのかもわからない。でも、ライトはアナルが見えるように使うのだから。きつと皺の様子まで見られてしまっている。

「この穴はさー」

山城が話した。無意識にそちらを向く。

「お尻を付きつけるだけじゃなくて、ペニスを入れるためでもあるんだよ」

何のためかわかる？ と、山城の表情が問いかけている。

「……精液、を……出すためですか」

「うん」山城がほほ笑む。「でもそれだけじゃない。他にも出せるもの、あるでしょ」

「……え、まさか」

「何だと思う？」

「……おしっこ……?」

「そう。お客さんにそれらを差し上げるための穴でもある」

「え……」

排泄物だ。それを「差し上げる」と表現したことが嘔み合わなかった。

「飲ませてと言われたら飲ませてあげて。飲ませるなら床の方がしやすいけど……ガラスの壁を滝みたいにおしっこが流れてくるのがいいってお客さんもいるだろうから」

壁にペニスを入れて腰を押しつけ、排尿をする――。

汚いとか恥ずかしいとか嫌だとか思う前に、その姿を想像してしまった。

「素直だね。おちんちん、ぴくぴくしてるよ」

「あっ」

「おっと、動かない動かない」

「あ……すみません」

アナルに合わせて丸を描くだけなら、もう終わっているのではないだろうか。けれど、なかなか声は掛からない。

時間が、とても長く感じられた――。

そしてベッドの足側の壁にももう一つ穴を開けると、ようやく恥ずかしい時間が終わった。

「服はクリーニングに出しておくね。万が一のことが起きたときのために、こちらで用意した着替えはこの部屋の外廊下の端のロッカーに置いてあるから。でもお客さんには知られないようにしてね。パンツとか持っただけじゃなかったら困るし」

茶目っ気たっぷりに言った山城は、郁実を置いて外廊下に出た。それから郁実を振り返り、着替え置き場を示すように廊下の端のロッカーのドアを一度だけ開いてみせた。

郁実がそれに頷いて答えると、山城は笑顔で手を振って出て行った。

4. 仕事開始

一人になると、やけに部屋が広く感じられた。

(何をしよう……)

ひとまず登録上は休日なし、掃除も自分でするということになっている。掃除道具は一番プレイに影響の

ないベッド下に置かれているのでいつでも使えるが、どこもかしこもピカピカだ。

(それにしても本当に透明だ……)

携帯もテレビも本もない。かといって仕事が始まってすぐにベッドに横になるのもなあと思っていると、渡されたばかりの端末が震えた。

「あ……」

コメント欄の閉鎖が解かれ、一覧が表示されていた。IDらしき文字列と、客の登録名の下に郁実宛の言葉が並んでいる。

【ケイくんかわいい】

【エツチな身体をもっとよく見せて】

【乳首がピンク色だね】

【はじめまして。よろしくね、ケイくん】

【早くオナニーして】

(もうこんなに……)

そう思った瞬間には端末が震え、カメラマークの横の数字が続々と増えた。一番下の売り上げの欄には、すでに五万を超える金額が表示されている。

思わず声を出しそうになった口を慌てて閉じる。この部屋にはカメラだけでなくマイクもついているのだ。客の前で金銭的なことを口にするわけにはいかない。

あつという間に視聴者が三十人を超えた。

(嘘……すごい)

さっきまでは暇な時間をどう過ごそう、なんてのんきに考えていたのに緊張してきてしまった。

みんなお金を払い、自分の身体を見に来ているのだ――そう思うと期待に応えなきゃいけないと焦りを覚える。

【ベッドで足を開いて】

【イくところが見たいな】

【カメラにちんぽ押しつけて】

【皮むいて亀頭を見せて】

コメントが止まらない。言うことを聞かせるためか高額の投げ銭が続き、売り上げが二十万円を超えた。

【一緒にオナニーしよ】

【突っ込みたい】

【えっちなこと言ってみて】

「えっと……」

コメントの希望がバラバラだった。排泄が見たい人、オナニーが見たい人、自己紹介をしてほしい人。一言でオナニーと言ったって乳首オナニーがいい人もいればカメラの前でのこすりつけオナニーや、ダイニングのデイルド付き椅子に座っての手コキなど様々だった。

(どうしよう……)

端末の振動が止まらないので、ひとまず設定ボタンからバイブ機能をオフにする。

室内を改めて見回すと、寝室とダイニングの中間に透明な棚があり、ローションボトルやオナホールにデイルド、エネマグラなどのアダルトグッズが置かれていた。さっきは説明されなかったが、ここに置かれている以上は自由に使っているというところだろう。

(とりあえず、これでいいかな)

緊張でうまくできないかもしれない。けれどオナホールなら勃起さえできれば、あとは気持ちよくなれるだろう。

小さめのものを一つ手に取り、ローションを穴の中に注ぎ込む。

【オナホールオナニーか】

【ちゅこゅこするの?】

【オナホール小さくない?】

【腰ふりオナニーが見たかったな】

【お尻には何も入れないの?】

【え、まさかタチじゃないよね? なわけないか】

読めば読むほど心の熱は高まるのに、ペニスは少しも大きくならない。

「ちんちん……」

【かわいい。いつもちんちんって言うてるの?】

【子どもみたい】

【子どもちんちん舐めてあげたいな】

【ちんちん!】

小さな声で呟いただけだったのに。どうやら相当性能のいいマイクを使っているらしい。

(つてことはカメラもいいやつだよ……)

郁実が使っている携帯のカメラなんて比較にならないほどの画質の良さだろう。恥ずかしいところを、自分でも直接は見たことがないようなところを鮮明な映像で見られてしまう。

枕の横の壁に端末を立てかけ、手で支えなくてもコメントが読めるようにする。

「あ……」

ベッドに仰向けで寝転がると、天井に黒いカメラが見えた。きつと今、たくさんの男の人があのカメラからの映像を見てペニスをしごこうとしている。

(すごい……)

これまでは録画しておいたものを編集してアップするだけで、コメントだって書かれてから何日も経ってから目を通すだけだった。

なのに今はリアルタイムで見られ、その感想を同時進行で送りつけられている。

「あ……ん」

左手でオナホールを持ち、右手でペニスを握る。軽くしごくだけでそれはすぐに膨らみ、硬くなった。

【素直なちんちん】

【俺もうイツちゃいそう】

【寝転んでオナホ使うのかわいすぎ】

【もっと足開いて】

【すごい……見られてる……】

【うん。見てるよ】

【もっと見せつけて】

【えっちな声いっぱい出して】

カメラも見たい。けれどコメントも読みたいし、目を閉じて自分の世界に入り、みんなの目を意識しながら思い切りこすりたいたいと思う。

どれも同時には叶わないけれど、これからは毎日ここで過ごすのだ。ひとつひとつ、願望を叶えていくことができる。

「あっ……もうイキそう……」

まだほとんど刺激していないのに。明らかに興奮が高まりすぎていた。

【早すぎ】

【かわいい】

【オナホ意味なさすぎてやばい】

【早漏なんだ】

【たくさん出して】

【かけられたいし、飲んであげたい】

【ちんちんイクって言いながら出して】

「そんな……」

コメントを読んで、カメラに視線を向ける。みんなが見ていると思ったら、自然と足の開きが大きくなった。

【えっちなあんよ】

【M字開脚！】

「あ、あっ……出すところ見てっ……」

もうコメントは読めなかった。手にしたままだったオナホールをペニスにかぶせ、夢中でしごく。

「ああっ！ 出る出るっ！ ちんちんイクっ！」

グジュグジュと水音を立てながら右手を思いきり動かすと、あつという間にイッてしまった。家で動画を撮っていたときは乳首を弄って焦らしたりしていたのに、そんな余裕はまったくなかった。

「ああ……」

目を閉じて呼吸を整え、気だるさを抱えながら横を向いてコメントを読む。

【いっぱい出た？】

【次いくときはオナホ外して出すところ見せてね】

【いった後のちんちん見せて】

「あっ！」

そうか、そういうこともしないといけないのか。

今すぐ二度目のオナニーはできそうになかったので、オナホールを外してペニスを解放する。

「見える……見えますか？」

誰に言うでもなく呟くと、コメントが一気に増えた。

【ちんちんの皮むいて】

【先っぽ見せて】

【まだ半起ちなのかわいすぎる】

【お掃除フェラしたい】

(わ……すごい……)

なんていやらしい世界だろう。こんな気持ちよくさせてもらって、お金までもらえるなんて。

【亀頭が見たいな】

【濡れてる】

【亀頭責めしたい】

【かわいい】

【潮吹きして】

ぼんぼんと表示されていくコメント。人によってはIDの横に投げ銭の金額も表示されていた。

「あ……ちんちんの先っぽ……」

わざと声に出しながら、先端を隠す皮をゆっくりとむく。ローションと精液が混ざったねっとりとした液体がとろりと垂れた。

「ん……」

これでみんな喜んでくれるだろうか。そう思ったのに、届いたコメントは一つだけだった。

【敏感そうなちんちん】

射精してしまったので飽きたのだろうか。しかしカメラマークの横の人数は五十を超えている。

「みんなオナニーしてくれてる……？」

【してるよ】

【もういきそう】

【ぶっかけたい】

さっきまでとは違う、端的な返事がリアルだった。

（いくところを見ながらするより、いった後のちんちんを見ながらする方が好きって人が多いってことかな……）

それなら頑張りどころだ。オナニーをしているときは一人で快樂ばかりを追ってしまったので、お金を払ってくれている人たちにお返しをしたい。

「もっと見て……」

けれど何より、オカズにされたかった。いやらしいことに使われたい。

【おしり見せて】

「おしり……」

この部屋に死角はないと聞いている。辺りを見回すとベッドの足側の壁にカメラが見えた。そこを意識しながら四つん這いになって尻を上げる。

「お尻……見える……？ 見て」

端末を手にすると、読み切れないほどのコメントが流れた。

【めっちゃ良く見える】

【ピンク色】

【突っ込みたい】

【仲も見せて】

誤字があるのは訂正している余裕がないか、もしくは手がふさがっていて音声入力を使っているからなのかもしれない。

「なか……」

端末を枕の横に置き、身体を頭で支えて両手を尻に回す。深呼吸をしてからぐつと開いた。

「お尻……中も見える……？」

コメントはなかった。みんな食い入るように見えてきているのかもしれない。そう思ったらたまらなくなつて、四つん這いのまま再びペニスを握った。

二回も射精をすると、さすがに性欲はおさまった。それは視聴者も同じなのか一気に人数が減り、今この部屋を見ているのは六人だけになつていた。

(いや、それでも多いよね……)

人気がある子なら、もっと視聴者がいるのだろう。でも自分は今日入ったばかり——いや入ったばかりだからこそ、新しいもの見たさでまだ六人も残ってくれているのかもしれない。

(これから頑張らなきゃ……)

山城は人の趣味はそれぞれだから、食事を見たい人や寝ているところを見たい人など様々だと言っていたけれど裸で過ごしている以上、目的はいやらしいことのはずだ。

(一回で我慢しておけばよかったな……)

興奮に耐えきれず、つい勢いで二度も抜いてしまった。でも今思えば、一回目はまだしも二回目はずっと焦らして長く楽しむとか、場所や体勢を変えるなどした方がよかつただろう。

(次、頑張ろう)

決意を固めると喉の渴きを覚えた。何か飲みた——そういえば、小さな冷蔵庫が棚の隣にあった。

そろりとベッドから下り、冷蔵庫のドアを開ける。中にはお茶や水のペットボトル、フルーツジュースのパックだけでなく缶ビールまであった。

「お酒か……」

この部屋に入って一時間。尿意はまだない。しかし酒を飲めばトイレが近くなって、排尿シーンが好きな人が来てくれるかもしれない。

それに、興奮もしていないときに、見られながらの排

尿なんてできそうにない。それなら酒の力を借りても一度経験してしまった方が後々楽だろう。

(別に、弱いわけじゃないし)

郁実は缶ビールを手に取ると、あえて陰部を隠すようにベッドの上で膝を抱え、ごくんごくんと飲み始めた。

(あつ、やば……)

下腹部に感じる違和感。明らかな尿意。缶ビールはまだ一本空いただけ。酔ってはいない。

(トイレ……でも……)

さっきは何も考えていなかったけれど、いざこうして尿意を感じ取ってみると、もし排尿姿を見たいという人がいなかったらどうしようかと不安になった。

むしろ今いる人が、そういう姿は見たくないと画面を閉じてしまうかもしれない。

端末の画面を見る。

【お酒強いの？】

【おつまみなしで飲めるなんてすごい】

【俺も一緒に飲んでるよ】

(でもずっとここで過ごすことは、いつかはトイレを使うんだし……)

腹を決めねばならないだろう。それでも視聴者が減ってしまうのが怖くて、試しに小さな声で呟いてみる。

「お……おしっこ……」

言った後、ちらりと横目でコメントを盗み見る。

【ケイクンのおしっこ！】

【見たい見たい】

【この時を待ってた】

【早く出して。そこでいいよ】

【座ってする？ 立ってしてるところが見たいな】

視聴者は三人ほど減った。やっぱり……と残念に思っていると、突然画面の右上にトイレマークがついた。その途端、一気に人が増えた。

【トイレマークがついたから来たよ】

【おしっこ？ うんち？】

【トイレまだー？】

【仲間増えたー？】

「え？ 仲間？」

つい、コメントの一つに反応してしまった。すぐに返信が来る。

【知らない？ ここは見てる人が今していることをオープンにできるんだよ。俺が今、ケイクンがおしっこするって表示出したの】

そうだったのか。では今増えた人は確実に排尿に興味がある人たちということだ。

(め、めちゃくちゃ恥ずかしい……)

けれど排尿シーン見たさに人が増えてくれたことはありがたかった。

「おしっこします……」

小さな声で言うから立ち上がる。全裸で歩くこと

に慣れず、つい股間を手で覆ってしまいたくなるけれど、さつき手を洗いに立った際にそれをしたら隠さな
いというコメントが殺到したのだ。

ペニスの揺れに恥じ入りながら、ガラスでできたト
イレの個室に入る。水洗タンクはないタイプで、ポツ
ンと便座が置かれている。

(あれ、これって)

壁側か室内側か、どちらを向いて座ったらいいのだ
ろう。便座の形状を見るとどちらを向いてもいいよう
な気がするけれど――。

戸惑ったときはコメントを見るに限る。さつきから
もう何度も視聴者のコメントに救われていた。

【便座の上で四つん這いになって】

【外側の方がカメラが近いから外向きがいいな】

【トイレじゃなくてお風呂でして】

やはりどちらを向いてもいいのだろう。さすがに便
座の上で四つん這いになるのも、お風呂で排尿するの
もまだ難しい。だからせめて、外廊下の方を向いて排尿
することにした。

「ン……」

【おしっこタイム】

【足もつと開いて】

【座ってる派なんだ】

【ちんちんよく見えないよー】

【おしっこまだー？】

【ゆっくり出して！】

【えっちな顔になってる】

【おしっこしながら実況して！】

【待ってた！】

【立ってして、ちゃんと見せつけて】

【立ちションがいいよ。跳ねたおしっこはちゃんと四つん這いでお掃除してね！】

【飲みたいいいい】

オナニーの時よりコメントが多い。こういう生活のシーンは、市販のAVではなかなか見ることができないからだろうか。

便座から腰を上げ、左手に端末、右手でペニスを持つて便座に向き合う。

【やった】

【立ちションきた！】

【チンポ小さくてかわいいね】

【ちゃんと音立ててね】

【スタンバイ完了】

スタンバイ？ と疑問に思ったけれど、おそらくオナニーの準備だろう。排尿までオカズになる。そう思うとたまらない。

「おしっこ出します……」

恥ずかしい宣言をして、膀胱を意識を向ける。けれど見られているとわかっているからか、なかなか排尿に集中できない。

【かわいい。おしっこ下手くそ】

【まだ？】

【オムツしてあげたい】

【ゆっくりでいいよ】

【大人なのにうまくできなくてトイレの前で戸惑って
すごいかわいい】

「やだ……」

ついコメントを見てしまった。ちょっと意地悪な言
葉たちが全身を熱くする。

「ちんちん起っちゃう……」

【おしっこなのに勃起しちゃうの？】

【エッチ】

【おしっこ前にシコシコする？】

言葉かけられる度に興奮してしまう。酒が入って
いるせいもあるのだろうが、たまらない。

〃〃略〃〃

「こちらのお客様が、ケイくんの精液を飲んでくださ
るよ」

「あ……」

恥ずかしい紹介のしかたに顔が熱くなった。それを
ごまかすようにもう一度頭を下げる。

「あの、二度も寝ちゃってすみませんでした。それと貞
操帯、ありがとうございます」

貞操帯をもたらったことは知っていたはずなのに、な
ぜか山城が白い仮面の男性を見た。

「貞操帯を？」

男性は山城を見てただ頷くだけだった。やはり山城相手にも話はしないらしい。もしかしたら、声から正体がばれるのを避けたいのかもしれない。

男性を外廊下に残し、山城が部屋に入ってくる。

「じゃあ貞操帯を外してくれる？」

「は、はい」

ベッドに座り、少し考えた末に男性客の方を向いて足を開いた。

二人の男性に見られながら自分で貞操帯を外すのは恥ずかしく、手汗がひどい。しかも急がなきゃと思ってしまうたせいで、うまく外すことができなかった。

郁実の背後に立った山城が言う。

「焦らなくていいよ。怪我しないように気を付けてね」

「すみません」

ちらりと向かいにいる男性に視線を投げる。すると山城に同意するように頷いた。

「すみません……」

もう一度謝ってから、改めて貞操帯に向き直る。二人が焦らないでいいと言ってくれたおかげか、今度は金具を外すことができた。

「よしじゃあ」山城が革の手袋をはめた。「ごめんね、触りたくないとかそういうんじゃないよ。でもケイくんは俺のじゃないから」

「はい、大丈夫です」

少なくとも客の前で従業員が商品に触れるわけにはいかないということだろう。

山城がベッドに上がったので、場所を空けるように壁側に尻を動かす。

「後ろからするよ」

「はい」

正面には白い仮面の男性。背後には郁実を抱き込むように座る山城。

(や、やばい……)

すごくいやらしい。このシチュエーションだけでイってしまいそう。

「緊張しないでいいよ。怖くないからね」

「は、はい……よろしくお願いします」

こくと喉が鳴った。それすら聞こえてしまいそうなほど室内は静かだった。

「じゃあまずはちんちんを立たせて——っともう起つてるか。じゃあちんちんを握って、いつもしているみたいに手でしごいてみて」

もう起つてる。その言葉だけでじわりとカウパーがにじんだ。おそらく山城には見えないだろうが、白い仮面の男性の目には映っているはずだ。

「ンッ……」

「昨日たくさんちんちんいじったけど、痛みはない？」

「は、はい」

「午前中はイかなかったんだね」

「はい、我慢、しましたっ……」

「貞操帯、ただでよかったね」

「はいっ」

男性の顔を見る。すぐに視線が交わった。その目が柔らかに細められる。

「ああっ……！」

オナニー姿をそんな優しい表情で見守られるなんて。

「あ、」

「イきそう？」

「もう少し……」

「焦らなくていいよ。ケイクンが大好きなところをいじってごらん。乳首だっけ触っていいよ」

「はいっ」

言われたとおり左手で乳首をこねる。足を大きく開いて右手でペニス、左手で乳首をいじるなんて、自ら変態だと名乗っているみたい。

「うん、上手。いいよ、エッチな音もしてきたね」

「ああっ……」

「気持ちいい？」

声が出ず、こくこくと頷く。

「じゃあお客様の目を見ながら気持ちいいって言ってごらん」

「あ……」

そうだ。自分だけが満足してはいけない。

知らず知らずのうちに伏せていた目を上げ、白い仮面の奥にある優しい瞳を見つめる。

「ちんちんっ、きもちいいっ！ 乳首もっ……！」

やはり男性は口を開こうとはしなかった。けれど、わかっていと言うように頷いてくれる。それがなぜか、

全身を包み込まれているようで胸が温かくなった。

「アアッ！ もういきそうですっ……！」

言った瞬間、革の手袋をはめた手が郁実の手首を握った。

「ああ、アア！ あああ！ 気持ちいい、気持ちいいっ！
イクうっ！」

最高に気持ちいい。そう思った時、手首を握る山城の手の力が強くなり、強引にペニスから外された。

「ああ！ いやっ！ やだ、やだやだ、やだあっ！」

手首は掴まれたままだった。左手も掴まれ、完全に拘束される。

「やだあっ！ ちんちんっ！ ちんちんっ！」

郁実が騒いでも、山城も男性も何も言わなかった。

ぐずるような叫び声と、頭を振る音だけが部屋に響く。

「やだあ！ ちんちん！ ああっ……！」

刺激を止めさせられてから五秒ほどが経った後、びゆるびゆるっと精液が飛び出して亀頭を白く染めた。

「やああ……！」

さっきまではすごく気持ちよかったのに。

「うん、つらいね」

「ちんちん、ちんちんがっ」

最高の快感を奪われたペニスは硬く勃起したままだった。まるで自身が射精したことに気付いていないみたい。

「ちんちんつらいね。気持ちよく射精したかったね。で

もこれがルーインドオーガズムだよ。これを自分でできるようになってほしい」

「そんな……」

無理だと思った。もうイくと思った瞬間に自ら刺激するのをやめるなんて。

「でもお客様の希望だよ。ケイクんの精液を全部飲ませてほしいって。この方法なら、手を離してから出るまでの間に穴にちんちん入れられるでしょ」

「あ……」

そうだった。しかもそれを希望した本人が目の前にいたのだ。

おずおずと視線を上げる。

怒られるかもしれないと思ったのに、男性は先ほどよりも熱のこもった目で郁実を見つめていた。

「無理ですって言う？」

山城に首を振る。

「できるようにになりたいです……」

「うん。じゃあもう一度頑張ってみようか。今度は自分でしてごらん」

「自分で……」

「そう。イくと思ったら手を外すんだよ」

「……はい」

けれど自信はなかった。だって快樂のない射精をってしまったせいで、今度こそ気持ちよくなりたいという思いが強くなってしまっている。

「あ」

背後で山城が何かに気付いたような声を上げた。振り向くと、正面を見るように促される。

視線を戻すと、男性が部屋を中心に指していた。

「ケイくんが自分で頑張ったルーインドオーガズムの精液を飲ませてほしいって」

「……でも、できるかどうか」

「失敗したとしても怒るような人じゃないから大丈夫」

その言い方に、常連客なのだと悟った。それなら、山城から郁実が初心者であることも聞いているだろう。

そう安堵すると同時に、他の人にもこんな優しい目で見つめたり、眠れるように差し入れをしているのかと思うと嫉妬のような不快感を覚えた。

「おいで」

「あ、はいっ」

ベッドを下りて山城について行き、部屋の中央に開けられた穴の前で膝をつく。

客の男性を振り返ると、車の整備で使うようなキヤスター付きの板に背を乗せて、郁実の下にやってくる場所だった。

「あ……」

「普段、カメラでは下からも撮られてるけど、こうして実際に下から見つめられるのもエッチでしょ」

「恥ずかしいです……」

「ケイくんが大好きなやつだね。お客様のことを見て、いやらしい気持ちを高めながらちんちんをしごいてごらん。もうイくと思ったら床に伏せて穴にちんちんを

入れて」

「はい……」

本当にできるだろうか。自分で手を止めて穴にペニスを挿入して――それができたら、あの優しい目の男の人に精液を飲んでもらうことができる。きつと言葉にはされなくても、心の中でたくさん褒めてくれるだろう。

「ンッ……」

戸惑いからか、ペニスは半起ちになっていた。最初はそつと揉むようにして、しっかりと勃起させてから左手をもう一度乳首に添える。

「んう……」

「ケイクくんは乳首が好きだね」

「ア……はい、ちく、びっ、好き、です」

「乳首イキができるようになりたいと思ったことはないので？」

答えられるよう、乳首をこねる手を止める。

「動画で、乳首だけで射精する人を見て羨ましいなっ
て思ったことはあるんですけど、やってみようと思っ
てもどうしても我慢できなくて」

「ちんちん触っちゃう？」

「はい……」

「ちんちんいじり、すごく好きなんだね。我慢できない
のもかわいい」

「あ……」

山城の協力のおかげで興奮が高まった。熱い目で見

上げてくる男性客と視線を交わらせながら、裏筋や亀頭をこねる。

「アアッ……」

「カウパーが垂れそうだったら、それも穴に落としてあげて」

「はい」

本当は、それをローション代わりにして亀頭をこね回したかった。でも飲んでもらえるのならそれも嬉しい。

「体液、初めて飲んでもらえるの嬉しいね」

「はい——あっ」

「イきたくなってきた？」

「はいっ……」

でももうちょよっと。もうちょよっと気持ちいいままでいたい。

「すごいエッチな顔。本当に見られるのが好きだね」

「んっ」

もう言葉を返す余裕はなかった。少しでも長く快感を得られるように四つん這いになり、亀頭を床穴のふちに触れさせた状態でしごく。乳首はいじれなくなっただけれど、すぐ下に男の人の口があると思うとじゅうぶん気持ちは高まった。

「ああっ、あ、あっ……」

「そろそろかな？」

「はいっ……もうっ……」

この後尿道責めや、グラスへの潮吹き（飲み！）などを経験します。

11万5千字です。

エロ描写濃いめ。

どうぞよろしくお願いいたします！

©goneone (うーわんわん)

2024/ 7/ 21

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。